

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 17 日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592412

研究課題名(和文)看護コミュニケーションスキル育成プログラムの開発と教育実践

研究課題名(英文)Education and practice development of nursing communication skills training program

研究代表者

村松 由紀(muraamtsu, yuki)

国際医療福祉大学・保健医療学部・教授

研究者番号：10348097

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：看護技術は、対人関係を前提としているにも関わらず看護系大学入学時点において基本的・常識的な対人関係スキルを伴わない学生への対処として対人関係スキル育成プログラムを構築した。その内容構成は看護実践の基盤となる基本的対人関係スキル(1年次)を土台に日常的な看護場面における対人関係を学ぶ(2年次)。介入前後の比較より効果は検証され、更に臨地実習から獲得する学びが相乗的に作用した。家族構成やコミュニティー、コミュニケーションツールの変化により現代の看護学生の対人スキルは、日常的無意図的に培うことが困難な時代である。短期的な介入ではなく複数科目による横断的な教育ストラテジーが必要である。

研究成果の概要(英文)：We designed a program to develop interpersonal skills of new nursing students who do not yet have fundamental and commonsensical interpersonal skills although nursing technique essentially needs human relations. The program contains fundamental interpersonal skills (1st year) which provide a critical basis of practical nursing and skills for human relations in daily nursing (2nd year). We confirmed the effect of the program through comparing before and after the program. Furthermore, practical learning is synergistically improved by the program. Interpersonal skills which are necessary for nursing are hardly subconsciously learned through daily life because of modern configuration of family and community and changes in communication tools. Thus, only transient intervention would not be enough, but cross-sectional education strategy with multiple classes would be needed.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護コミュニケーション 対人関係スキル リメディアル教育

1. 研究開始当初の背景

看護実践における対人関係スキルの多くは、専門的知識や理論等に基づく妥当性や必要性を伴うが、その基盤には、より「日常的・常識的な対人関係スキル」を前提とする(中西ら, 2006)。しかし、近年では、大学入学時においてこうしたスキルを欠く学生の増大が目立つ現状があり(洞澤, 2005)、その社会的背景には、学校教育やコミュニティーの変貌、通信器機の発達や利便性に伴うコミュニケーションツールの変容等、伝統的な対人関係スキルの発達を阻んでいる要因が存在する。このような看護学生の対人関係スキルの現状について、本研究グループが看護教員を対象に実施した調査結果から国語力の低下、礼節・礼儀の欠如、受身・依存的態度が表出され、これらの問題は「自己 - 他者関係」の形成に必要な自我の統合性の未発達に由来していた。自我が統合的・自律的に発達していくためには、自尊感情が必要であり(藤原, 1981)、人間の社会的行動たとえば他者から受ける表出に対する反応や社会的参加を規定する重要な要因(遠藤ら, 1974)と捉えられている。したがって自尊感情の高い人は肯定的な自己イメージを持ち、内面的にも安定し対人関係における適応行動がとり易いのではないかと推測する。

一方、本研究グループによる既存資料(看護学教育で使用されているテキスト・著作類全 22 冊)の分析から看護の対人関係スキルに関する記述部分の前提事項を論理的に抽出した結果、現代の大学生が抱えている対人関係スキルの発達を阻む社会現象を生み出す構造的な問題点については、全く触れられていないことが明らかになった(中西ら 2006)。このように日常的場面においても未発達な対人関係を示す看護学生が、臨地実習の場面において、より高度な患者対看護師関係を迫られることにはさまざまな問題が生じることは当然のことである。近年、大学近年、大学生を中心に基礎学力を補う目的で入学前教育・初年時教育・補修などのリメディアル教育という新しい教育の形が出現している(山下ら, 2009; 岩田ら, 2008; 近藤, 2007)。前述する社会的背景による学生の対人関係スキル低下状態への対処は、もはやリメディアル教育と位置づけ「日常的・常識的な対人関係スキル」の補修は、看護学教育の場に委ねられたと共にこの問題への対処は喫緊の課題である。

用語の定義

- 対人関係スキル：「人間関係に関する基本的な知識、相手の感情や思考についての理解力、对人的葛藤の処理方法につい

て理解など人間関係に関する認知情報処理の能力、およびこれを適切かつ効果的に行動として実行する技能」と定義し、一般的場面におけるより基本的・常識的な共通スキルを指す。

- 社会的スキル：対人関係スキルの行動的側面(下線部分)を社会的スキルと定義する(相川, 2010)。
- 看護コミュニケーション：対人関係スキルの概念を前提に看護の対象者対看護師関係における言語的・非言語的コミュニケーションと定義し、看護の取り扱う諸理論の理解を基に適切かつ効果的に行動として実行する技能と定義する。

2. 研究の目的

本研究は、看護学生の抱える対人関係スキルの低下状態に対処するためのコミュニケーションスキル育成プログラム開発と学生のコミュニケーション能力の発達を経年の時系列で追跡するパネル調査として以下の2つから検証する。

- (1) プログラムの効果を介入前後の客観的評価から検証する。
- (2) プログラム介入後に展開される臨地実習前後におけるコミュニケーション能力評価から学修進行に伴うコミュニケーション能力の発達および関連要因を検証する。

3. 研究の方法

本研究グループが実施した先行研究から抽出された概念を軸に看護コミュニケーションスキルの成り立ちを構造的に捉え、以下のような仮説を立てた。『看護コミュニケーションスキルとは、基本的・常識的な対人関係技(共通スキル)を獲得していることを前提にさまざまな学習(理論に基づくスキル含む)および経験を経て段階的に発達する』ものである(図1)。この看護コミュニケーションスキルの発達は、3つの段階的構造で構成されている。基本的・常識的な対人関係技術を低階層に位置し、一般的な人間関係を円滑に図る場合に必要とされるスキル(共通スキル)である。また中間層は、狭義の患者 - 看護師関係に必要なスキルであり共通スキルを獲得していることが前提となり発達する。高次の階層は、より治療的なコミュニケーションスキルとして専門的で高度な対人関係技術が要求される。

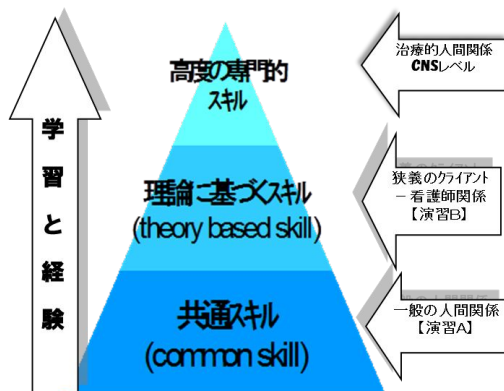


図1：看護の対人関係スキルの成り立ち概念図(中西)

(1) コミュニケーションスキル育成プログラムについて：

演習 A (共通スキル編：1 年前期・選択科目 1 単位・30h)

日常的・常識的な対人関係やコミュニケーションの在り方について理論や方法論などを講義し、その後表現力訓練やロールプレいの演習の組み合わせを 1 セット(計 3 コマ)とし合計 4 セットで構成されている。

演習 B (理論に基づくスキル編：2 年前期・必修科目 1 単位・30h)

人間関係理論やニード理論など諸理論に基づくスキルであり、臨床での多様な人間関係を成立させる基礎的なコミュニケーション能力を高めることを目的に演習 A の学習形式を発展的に踏襲し、より具体的な看護場面に接近させる内容構成である。

(2) 調査対象者：2010 年度に入学した看護系大学の 1 年生 132 名のうち選択科目「演習 A」を履修し、その後 2011 年度(2 年次)に演習 B を履修した学生で、尚かつ研究同意の得られた 129 名。

(3) プログラムの評価：

自記式質問紙調査による定量評価およびレビュー用紙による記述内容からの定性評価により評価を行った。

定量評価の調査表構成

a. KISS-18 (菊池, 1988) 18 項目(以下, 尺度 a)：《演習 A および B の評価》社会的スキルを測定する尺度であり、若者にとって必要な社会的スキル(Goldstein ら, 1986) [対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル] を構成する概念を枠組みに作成された。『初歩的なスキル』『高度のスキル』『感情処理の

スキル』『攻撃に代わるスキル』『ストレスを処理するスキル』『計画のスキル』の 6 因子により構成され、信頼性・妥当性は広く確認されている(菊池, 2007)。

b. 看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度(上野, 2005) 19 項目(以下, 尺度 b) 《演習 B の評価》：看護師における患者とのコミュニケーションスキルを測定する尺度であり、『情報収集能力』『スムーズな話し方』『積極的な傾聴』『パーソナルスペース(視野交差)』『アサーション』の 5 因子により構成され、信頼性・内的整合性は検証されている(上野, 2005)。

c. 自尊感情尺度(山本ら, 1982) 10 項目(以下, 尺度 c)：質問紙法による主要な自尊感情尺度は、複数あるが、ローゼンバーグの尺度は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度を自尊感情と捉え、「非常によい」と感じるのではなく、「これでよい」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えている。自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠く状態としている。本尺度は、ローゼンバーグ(1965)により作成された自尊感情尺度 10 項目の邦訳版として信頼性・妥当性は広く確認されている。

d. 個人的属性について：年齢、性別、現在の居住環境(一人暮らし・家族と同居)、部活動やサークル活動への参加状況、アルバイトの有無を収集した。

介入後のレビュー用紙による記述内容からの定性評価：毎回授業後終了後に「考えたこと・気づいたこと」についてレビュー用紙に記述させた内容を分析対象とし、文脈ごとに区切りをつけコード化し「演習を通して学生が獲得したもの」および「授業の評価」に関するコードを抽出し、意味ごとに分類、類似するものをまとめてサブカテゴリーとしさらにカテゴリーへと抽象化した。

(4) 定量評価の分析方法：各尺度の項目分析を行い、天井効果およびフロアー効果の確認を行った後、記述統計および介入前後の経時的変化から各尺度の平均値を算出した。尺度間の関連について Spearman の順位相関係数を用いて検定し、関連のあった各 2 群間に対応のある t 検定を行った。また、下位尺度項目平均値を算出し下位尺度得点とした。さらに尺度の合計得点の平均値から低得点・高得点の 2 群に分け、各尺度下位尺度得点との t 検定を行った。各尺度の時系列の得点変化

の比較は分散分析と被験者内因子の多重比較を行った。分析には SPSS18.0 を使用し有意水準は 5%とした。

(5) 倫理的配慮：本学の倫理審査委員会の承認後、調査への協力は自由であり成績評価に影響しない、得られたデータはすべて統計的に処理し個人データを用いることはない、本研究以外には使用しないことを調査用紙に明記し口頭説明も行った。

4. 研究成果

(1) 対象者の特性

研究対象者の年齢構成は、19 歳(56.3%)、20 歳(39.2%)、21 歳(2.4%)、22 歳(0.2%)、23 歳以上(1.9%)、性別は、女子 114 名(88.4%)、男子 15 名(11.6%)であった。現在の居住環境については、親元を離れて一人暮らしをしている 73.3%、実家から通学している(家族と同居) 26.7%であった。2 年生に進級した時点で、アルバイトをしている学生は 68.3%、していない学生は 31.7%であった。就業の種類は、飲食店(59.0%)、小売業(24.1%)、塾など教育・学習支援(8.4%)、その他(8.4%)であった。64%の学生が何らかの部活動やサークル活動を行っていた。

(2) 介入プログラムの効果検証

演習 A について：

自記式質問紙尺度(a)(c)計 28 項目をいずれも 5 段階評定法の Likert 尺度にて回答を得た。介入前 2010 年 4 月(以下,T1)、介入終了直後同年 7 月(以下,T2)、基礎実習開始直前 2011 年 2 月(以下,T3)、基礎実習終了直後同年 2 月(以下,T4)の 4 回実施した。回収率は、91.4%(n=118)であった。尺度(a)の T1~T4 までの時系列でみた平均得点の変化を表 1 に示す。また、尺度(c)の合計得点の平均値から低得点・高得点の 2 群に分け、尺度(a)平均得点のクロス表(表 2)および尺度(a)の下位尺度項目得点と尺度(c)の 2 群間との比較を表 3 示す。

さらに、分散分析の結果、群間の得点差は 1%水準で有意差を認めた尺度

(a) : (F(1,117)=20681.70, p<.001). 尺度

(c) : (F(1,117)=41601.49, p<.001)

Tukey の多重比較(5%水準)では有意差を認めなかった。考察として入学時期は、自尊感情の低い学生群ほどストレスを処理するスキルが低く、授業終了直後では、他者へ指示する、謝る、助けを求めることや自他の感情処理および問題解決を導くスキルが高い学生群ほど高い自尊感情を示した。実習直前では、自尊感情得点が各期の中で最低値を示したことから実習に対する不安感や感情の不

安定さが伺えるが「計画のスキル」のみ有意差を認めたことは実習への計画性が伺える。2 つの尺度得点が、授業と実習の学習進度に対応して上昇していることからある一定の教育プログラム効果に示唆を与えたことに加え、対人関係スキルアップには臨地実習という場から獲得する学びが相乗的に作用した。

演習 B について：

自記式質問紙尺度(a)(b)(c)計 47 項目をいずれも 5 段階評定法の Likert 尺度にて回答を得た。介入前 2011 年 4 月(以下,T5)、介入終了直後同年 7 月(以下,T6)、基礎実習終了直後同年 9 月(以下,T7)の 3 回実施した。欠損値を除き合計 3 回の調査全てに回答したデータを分析対象(89 名、有効回答率 72.4%)とした。3 つの尺度は T5-T6, T6-T7 と経時的に正の相関を示した。

尺度(a) T5-T6; r=0.726, p<0.001,

T6-T7; r=0.667, p<0.001

尺度(b) T5-T6; r=0.508, p<0.001,

T6-T7; r=0.593, p<0.001

尺度(c) T5-T6; r=0.315, p<0.005,

T6-T7; r=0.508, p<0.001)。

尺度間の関連については、Spearman の順位相関係数を用いて検定し、関連のあった各 2 群間で対応のある t 検定を行った結果、尺度(c)のみ T5-T6 間で有意差を認めた

(t(88)=2.145, p<.05)。

表 1：プログラム前後および実習前後の社会的スキルの変化 (n=118)

	KISS-18	T1	T2	T3	T4
		平均 SD	平均 SD	平均 SD	平均 SD
I	初歩的スキル	3.37 ±.74	3.42 ±.74	3.47 ±.67	3.42 ±.63
II	高度のスキル	3.39 ±.58	3.47 ±.63	3.46 ±.57	3.50 ±.55
III	感情処理のスキル	3.26 ±.55	3.25 ±.58	3.27 ±.60	3.36 ±.61
IV	攻撃に代わるスキル	3.29 ±.60	3.25 ±.53	3.24 ±.55	3.30 ±.54
V	ストレスを処理するスキル	3.31 ±.60	3.28 ±.59	3.31 ±.57	3.25 ±.61
VI	計画のスキル	3.27 ±.63	3.27 ±.63	3.33 ±.54	3.39 ±.58

表 2：自尊感情高低 2 群の割合

自尊感情	T1	T2	T3	T4
低得点群	83.2%	73%	85%	66%
高得点群	16.8%	27%	15%	34%

自尊感情の上昇については統計的に検証されたが、対人関係スキルとして他者を肯定的

に捉えることは自己も否定しないということが授業とその後に展開された実習という学習と経験を重ねた成果だと考察する。各尺度平均値はいずれも授業前より授業後の方が得点の上昇を認めたことから一定の授業効果が示唆された。

自由記述のレビュー用紙による定性評価：

介入プログラムを通して、9つのサブカテゴリーから構成される【人との関わりにおいて大切なこと】を獲得していた(以下、カテゴリーを【 】 サブカテゴリーを<>で示す)。学生はコミュニケーションスキルを含む<人との関わりにおいて大切なこと>を学ぶとともに<自己理解><他者理解>を深め<気づきや学びの多様性の理解>や<視野の拡大>を実感していた。また、<対人スキルを学ぶ意義>の再確認の機会となるだけでなく<対人スキルを高める動機づけ>を得、<他者との関係形成>や<自己成長の実感>を獲得していた。さらに、「授業の評価」の観点から見ると、さまざまな状況におけるコミュニケーションの疑似体験は、学生にコミュニケーションを再考する機会をもたらし、「役に立つ」「内容の濃い授業」「楽しく学べた」など学生にとって有意義な経験となっていたことが明らかになり、本演習の有効性が確認された。また、体験後にディスカッション・発表を組み込んだことは、対人スキルの要点の再確認や多様な学びを共有する上でも有効と考えられた。2つの課題が示唆された。

看護系大学生の対人関係スキルとアルバイトや部活動経験との関連について：

アルバイトの有無と尺度(a)の平均得点は、「初歩的スキル」：(t(121)=3.38, p<.005)および「攻撃に代わるスキル」

(t(121)=2.78, p<.01)で有意差を認めた。また、部活動の有無と尺度(a)の平均得点も「初歩的スキル」：(t(121)=3.70, p<.001)および「攻撃に代わるスキル」：

(t(121)=2.59, p<.005)で有意差を認めた。一方、アルバイトおよび部活動の有無と尺度(b)得点は、有意ではなかった。

尺度(a)の「初歩的スキル」は、『初対面の人とスムーズな会話ができる』、「攻撃に代わるスキル」は『他者とのトラブルの処理能力』で構成されている。59%の学生が飲食店でアルバイトをしていることから接客等を通じ、培うことが可能なスキルと言える。一方、尺度(b)は看護師が患者との関係を成立させるためのより専門的な対人スキルである。筆者らは、看護を取り巻く対人関係スキルは一般の人間関係に共通するスキルを基盤に理論に基づく患者-看護師関係スキルが構築されると捉えている。看護学生の場合より意図的教育的介入の必要が示唆された。

表3：KISS-18下位尺度得点と自尊感情尺度2群間の比較

KISS-18下位尺度得点	自尊感情	T1				T2				T3				T4			
		N	平均値	SD	t値	N	平均値	SD	t値	N	平均値	SD	t値	N	平均値	SD	t値
「初歩的スキル」	低得点	101	3.34	±.73	-0.95	93	3.37	±.74		102	3.44	±.68		88	3.34	±.58	
	高得点	17	3.53	±.79		25	3.63	±.75	-1.53	15	3.73	±.63	-1.59	30	3.62	±.73	-2.1
「高度のスキル」	低得点	101	3.37	±.57	-0.77	93	3.41	±.59		103	3.45	±.56		88	3.45	±.49	
	高得点	17	3.49	±.62		25	3.69	±.75	-2	15	3.58	±.58	-0.79	30	3.66	±.67	-1.78
「感情処理のスキル」	低得点	101	3.24	±.54	-0.91	93	3.15	±.59		103	3.25	±.59		88	3.26	±.57	
	高得点	17	3.37	±.56		25	3.59	±.61	-3.2	15	3.42	±.64	-1.02	30	3.69	±.64	-3.4
「攻撃に代わるスキル」	低得点	101	3.28	±.63	-0.07	93	3.2	±.50		103	3.22	±.55		88	3.22	±.49	
	高得点	17	3.29	±.63		25	3.44	±.61	-2	15	3.42	±.49	-1.33	30	3.54	±.64	-2.9
「ストレスを処理するスキル」	低得点	101	3.26	±.57		93	3.23	±.57		103	3.29	±.55		88	3.12	±.50	
	高得点	17	3.59	±.70	-2.1	25	3.47	±.63	-1.77	15	3.44	±.69	-0.98	30	3.51	±.81	-2.8
「計画のスキル」	低得点	101	3.23	±.59	-1.82	93	3.22	±.63		103	3.28	±.54		88	3.33	±.53	
	高得点	17	3.53	±.78		25	3.47	±.63	-1.76	15	3.62	±.43	-2.3	30	3.67	±.64	-3.1

[参考文献]

中西睦子, 松澤和正, 寺内幸恵, 他 (2006): 学部課程看護学教育における基礎的対人関係スキル育成に関する研究 原理的考察, 第26回日本看護科学学会学術集会(大阪).

洞澤 伸 (2005): 二極分化する若者たちの対人コミュニケーション 「距離をおく若者たち」と「距離をおかない若者たち」, 岐阜大学地域学部研究報告, (18):73-89,

藤原正博 (1981): 自我同一性および自尊心の実証的研究, ナカニシア出版

遠藤辰雄, 安藤延男, 冷川昭子, 他 (1974): Self-Esteemの研究, 九州大学教育学部紀要, 3-65.

相川充・高井次郎 (2010): 展望 現代の社会心理学2 コミュニケーションと対人関係, 誠信書房

菊地彰夫編著 (2007): 社会的スキルを測る KISS-18 ハンドブック, 川島書店

山本真理子, 松井豊, 山成由紀子 (1982): 認知された自己の諸側面, 教育心理学研究, 30. 64-68.

上野栄一 (2005): 看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の開発, 日本看護科学学会誌, 25 (2) 47-55.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
〔学会発表〕(計12件)

村松由紀, 看護コミュニケーションスキル育成プログラムの教育効果検証, 第29回日本看護科学学会学術集会, 2009.11.28(千葉, 幕張メッセ)

樋本まゆみ, 看護コミュニケーション育成プログラム実施による学生の学び, 第14回日本看護管理学会年次大会, 2010.8.21(横浜, パシフィコ横浜)

村松由紀，看護コミュニケーションスキル育成プログラムの効果検証，日本看護学教育学会第 20 回学術集会，2010.8.1（大阪市，グランキューブ大阪）

村松由紀，看護系大学新入生に対するヒューマンスキル教育プログラムの効果検証，第 30 回日本看護科学学会学術集会，2010.12.3（札幌コンベンションセンター）

村松由紀，看護系大学生の対人関係スキルアルバイトや部活動経験との比較，第 31 回日本看護科学学会学術集会，2011.12.3（高知市，文化プラザかるぼーと）

村松由紀，医療福祉系学生の対人関係スキルの把握に関する研究 看護学生の社会的スキルとその関連要因 - ，第 1 回国際医療福祉大学学会学術大会，2011.9.2（栃木，国際医療福祉大学）

藤田京子，看護基礎教育におけるヒューマンスキルコミュニケーション演習プログラムの効果と課題，第 32 回日本看護科学学会学術集会，2012.11.30（東京国際フォーラム）

村松由紀，看護系大学生の対人関係スキル介入プログラム評価 入学時期から基礎実習終了までの発達，第 32 回日本看護科学学会学術集会，2012.12.1（東京国際フォーラム）

大野明美，社交的なコミュニケーションから専門的なコミュニケーション能力を獲得する看護教育，第 32 回日本看護科学学会学術集会，2012.11.30（東京国際フォーラム）

村松由紀，看護学生のコミュニケーション能力発達，第 2 回国際医療福祉大学学会学術大会，2012.9.1（栃木，国際医療福祉大学）

村松由紀，臨床看護師のコミュニケーションの特徴，第 32 回日本看護科学学会学術集会，2013.12.6（大阪国際会議）

村松由紀，看護コミュニケーション能力発達の構造化 看護学生と看護師と比較分析，第 3 回国際医療福祉大学学会学術大会，2013.8.31（栃木，国際医療福祉大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村松 由紀 (MURAMATSU YUKI)
国際医療福祉大学・保健医療学部看護学科・教授
研究者番号：10348097

(2) 研究分担者

中西 睦子 (NAKANISHI MUTUKO)
国際医療福祉大学大学院・研究科・教授
研究者番号：00070681

(3) 連携研究者

森川 奈緒美 (MORIKAWA NAOMI)
国際医療福祉大学・保健医療学部看護学科助教
研究者番号 (20445125)

(4) 連携研究者

石井 祐子 (ISHI YUKO)
国際医療福祉大学・保健医療学部看護学科助教
研究者番号：(70611797)

(5) 連携研究者

樺澤 一之 (KABASAWA KAZUYUKI)
大東文化大学・スポーツ健康科学部教授
研究者番号：(70095785)

(6) 連携研究者

藤田 京子 (FUZITA KYOUKO)
准教授
研究者番号：(20406169)